

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要

論文題目

留学生は「進学予備教育機関としての日本語学校」をどのように意味づけているのか

花井 伸也

2010年3月

1 修士論文の構成

第1章 はじめに

第2章 先行研究

第3章 調査

第4章 調査の結果と考察

第5章 おわりに

参考文献

本研究は5章からなる。第1章では、筆者自身がS日本語学校で経験した留学生とのエピソードから筆者の問題関心、問題意識、および研究課題を提示する。第2章では、日本語学校で学ぶ就学生、留学生を研究対象とした先行研究を取りあげ、本研究の位置を述べる。第3章では、本研究で筆者がおこなった調査について、インタビューイヤーを選定する過程、調査方法、分析方法について説明をおこなう。第4章では、インタビューデータを文字起こししたトランスクリプトから得られた会話文を提示し、留学生がS日本語学校を意味づけていく過程を詳細に記述する。第5章では、本研究全体のまとめとして、結論と今後の課題を述べる。

2 「第1章 はじめに」の概要

筆者の問題関心は、筆者が非常勤講師として勤めるS日本語学校に在籍していた留学生とのエピソードから生まれた。それは、留学生の多くは「進学目的」や「学習観」が曖昧なまま「進学に必要な授業」を意味づけているのではないかということである。そして、筆者は「進学予備教育機関としての日本語学校」は留学生にとってどのような意味があるのか、また、「進学予備教育機関としての日本語学校」として「試験対策」が求められるのは当然であると考えが、果たして「試験対策」だけでいいのだろうかと考えるようになった。そこで、留学生が日本語学校を意味づけていく過程を「教師やクラスメートとの関わり」という観点から詳細に記述することを、本研究の研究課題とした。

本研究の目的は以下の3点である。

- ① S 日本語学校に在籍していた留学生は、S 日本語学校をどのように意味づけているのか。また、それはどのような経験から意味づけられたものなのか、その過程を詳細に記述すること
- ② 留学生が S 日本語学校を意味づけていく過程において、教師やクラスメートは彼らとどのように関わり、彼らにとってどのような存在であると捉えられているのかを明らかにすること
- ③ ①、②から、「進学予備教育機関としての日本語学校」において教師は留学生に対してどのように関わるができるのかについて提言をおこなうこと

なお、本研究におけるフィールドは筆者が勤める S 日本語学校であり、インタビュアーは教師である筆者、インタビュイーは筆者の担当クラスに在籍していた留学生である。ともに限定的なものであるが、「特定の現場に根ざすローカリティを持ちながら、他者と共有できるような一般化をする」（やまだ 2002）ことを目指すものである。

3 「第 2 章 先行研究」の概要

日本語学校で学ぶ就学生や留学生を対象とした先行研究において、留学生はおおむね、自身の学習を自身で管理したが、自身がすべき日本語学習を意味づけてはいるのであるが、実際は、その方法を知らず、教師に依存していると言える。そして教師も、できる限り留学生のニーズに応えようとしながら、実際は、時間的な問題などから「試験対策」に偏りがちである。また、留学生を正確に捉えることができていないことから、留学生の「葛藤」に対応できていない。

しかし、これらの先行研究では教師の具体的な役割まで言及されておらず、また、どのような過程を経て、留学生が日本語学校をたとえば「家」（亀川 2005）のように捉えるようになったのかは明らかにされていない。本研究では、留学生がどのような過程を経て日本語学校を意味づけていくのかを詳細に記述し、その過程において教師やクラスメートはどのように関わっているのかを明らかにすることで、ひとつの「モデル」（やまだ 2002）を日本語学校教育の現場に提供しようというものである。

4 「第 3 章 調査」の概要

本研究では、2008年3月にS日本語学校を卒業し、S日本語学校が附属するS-IT専門学校へと内部進学した留学生に対し、インタビュー調査をおこなった。インタビューは同じクラスに在籍していた韓国人男性の江景（カンギョン）と中国人男性の福清（フクセイ）の2名である。なお、2名とも仮名である。本調査の目的は、お互いを「日本語の練習相手」以上の存在として捉えていた2人の関わりを中心にS日本語学校を意味づけていく過程を「モデル化」（やまだ2002）することであった。そして、筆者の立場は福清と江景が入学してから卒業するまでの全課程でクラスを担当していた非常勤講師である。

インタビューにあたっては、筆者が事前に作成しておいた調査依頼書に基づき、調査の概要・秘密厳守・自由参加について口頭及び文書で説明した。そして、インタビューに参加の意思を確認したうえで、承諾書にサインをしてもらった。秘密厳守・自由参加については調査終了後に改めて説明をおこない、調査協力者のプライバシーに配慮した。

インタビュー調査ではフリック（2002）における「エピソード・インタビュー」の手法を参考にした。インタビューの過程はICレコーダに記録し、文字化したトランスクリプトを分析用のデータとした。分析に当っては、会話単位に区切ったトランスクリプトについて、テーマごとにグループ化し、キーフレーズを抽象化していく過程を詳細に記述し、解釈を加えた。

5 「第4章 調査の結果と考察」の概要

5.1 江景にとってのS日本語学校（概要）

江景にとってS日本語学校は「文化を含んだ日本語を学ぶ場」、「「気づき」を得る場」、「内省の場」であり、自分の「居場所」であったようだ。また、「不真面目だった」韓国での学生時代を「内省」し、「自分自身を価値化」していく過程でもあった。

そして、クラスメートとは「ボディーランゲージ」でも「間違えた日本語」でも、「相手が何をいおうとしているか」を「もし自分が相手の立場だったらどのように表現するか」をいつも考えることで、会話が成り立ったことが「自信になった」と語っている。

また、江景にとって福清は、中国人ばかりのクラスで自分と「仲良く」してくれた「頼れる存在」であった。福清や他のクラスメートと「頼り頼られる関係」を通して、S日本語学校のクラスを「居場所」として捉えるようになっていた。

5.2 福清にとってのS日本語学校（概要）

福清にとってのS日本語学校は、「友人と楽しく日本語を学習する場」、「日本語を使う場」、「中心の行動の場」であり、江景と同様に「居場所」であったようだ。

福清にとって江景は「日本語で話す友人」であった。国籍が違うことから考え方の違いもあったようだが、「何でも話せ」で、「なぜ相手がそのような発言をしたのか」を「理解することができる」関係であり、「国籍とか、そういう差別はない」と語っていた。

また、クラスメートは「一緒に楽しく日本語を勉強する友人」であり、「勉強と生活はつながっている」という考えを持っている福清にとって、「勉強」と「遊び」のバランスを保つために重要な役割を担っている。そして福清は「感情」をつなぐことができる場として、S日本語学校を自分自身の「居場所」と捉えている。クラスメートから「質問をしたら答えてくれる人」と見られることで、クラスにおける自分自身の存在価値を認め、また、江景との「考え方の違いを理解しあう」関係や、「学習が知識や日本語能力試験2級合格に結びつく」S日本語学校での学習を通して、自分自身の価値を認めるようになっていった。

6 「第5章 おわりに」の概要

江景と福清は、お互いの考え方の違いを認めたくて「相手がなぜそのように言ったのか」ということを「理解」し、また、「なぜ相手と自分の考え方が違うのか」、「自分の考えをどう言えば伝えることができるのか」という「内省」とを繰り返して「お互いに理解できる関係」を築いた。また、その関係がクラスメートにも広がっていく過程で、江景はクラスのリーダーと見られ、福清は新生から頼りにされることで、クラスでの存在価値を認められたことを自覚し、「自分自身を価値化」へとつながるのである。また、クラスメートと「頼り頼られる」関係を通して、お互いに必要とし、必要とされる人がいる場として、S日本語学校を「居場所」として捉えるようになっていく。「居場所」とは「理解」と「内省」の「往還」から「自分自身を価値化」していく場である。そこでの教師の役割は「理解」と「内省」の「往還」を促すことであると考えられる。

日本語教育振興協会(2003)でも「日本語教育は単なる語学教育にとどまるべきではない」と述べられており、日本語学校においても「試験対策」のみならず、「日本語で何をするのか」を教師が常に考えて授業に臨むことが重要なのではないかと考えられる。日本語学校は「試験

対策」のために「目的」として日本語を覚えるだけではなく、教師やクラスメートの考え方を理解し、自分自身の考え方を教師やクラスメートに伝えるために「手段」として日本語を使う場でもあるべきなのである。

7 主要参考文献

ここでは修士論文概要書で触れた参考文献についてのみ掲載する。

市嶋典子・長嶺倫子(2008)「「進学動機の自覚を促がす」日本語教育実践の意義—レポート分析とエピソード・インタビューを基に—」『日本語教育論集』24、国立国語研究所、pp. 65-79

岡崎眸・池田玲子・影山洋子(1999)「日本語学習者による日本語教師のイメージ—アジア系学習者の場合—」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第52巻、お茶の水女子大学、pp. 269-279

加賀美常美代(1997)「日本語教育場面における異文化間コンフリクトの原因帰属—日本語教師とアジア系留学生との認知差—」『異文化間教育』11、異文化間教育学会 pp. 91-109

亀川順代(2005)「日本語学習者の日本語学校と日本語教師に対する意識についての一考察—メタファーによる分析を通して—」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』第5号、pp. 89-102

齋藤ひろみ(1996)「日本語学習者と教師のビリーフス—自立的学習に関わるビリーフスの調査を通して—」『言語文化と日本語教育』12、pp. 58-69、お茶の水女子大学日本言語文化学会

日本語教育振興協会(2003)『日本語教育機関による就学生・留学生の受け入れに関するガイドライン』

フリック,U(2002)『質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論』小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳、春秋社

やまだようこ(2002)「現場(フィールド)心理学における質的データからのモデル構成プロセス—「この世とあの世」イメージ画の図像モデルを基に—」『質的心理学研究』1、日本質的心理学会、pp. 107-128